

回 想

北 村 正 司

私が英語の教員になりましたのは、昭和6年3月小樽高等商業学校卒業の直後でありました。それから足かけ46年の歳月が流れました。この間絶えず英語教師の理想像として仰ぎ、その域に近づきたいと念願しましたのは、今は亡き恩師の苫米地英俊先生と浜林生之助先生でありました。

苫米地先生は当時商業英語では日本で第一の学者として定評を博しておられました。学生には日本一の先生に教わっているという大きな誇りと絶対の信頼感がありました。商業英語の講義は高等英文法を織り交ぜた興味津々たるものでありました。私たちは全身を耳にして一語も聞き洩らさじと傾聴しました。そこには常に快い緊張感がありました。先生はいわゆる親分肌で、学生を心から愛するという風がありましたが、一面講義は厳しく峻烈な言葉で学生を戒められることがありました。そんなわけで、しばしば長文の暗誦を課せられましたが、怠るなどということは考えられもしませんでした。先生のライフ・ワークはわが国商業英語学界の金字塔とも言うべき「商業英語通信軌範」で本文780ページ、追補15ページの計800ページになんなんとする大著でありましたが、私たちはこれを一所懸命に覚えたものでした。先生はよく、「自分の教えた卒業生の商業英語には責任を持つ」と言われていましたが、実際に母校から、わが国の貿易界の一流人物が輩出したのでありますから、先生の言葉は真実の重味を持っておりました。先生は学生の質問には喜んで応ぜられました。私は卒業してからも度々先生の教えを乞いました。公務多端の先生でありましたが、時には2時間、3時間と連続して指導を与えてくださいました。質疑に対する先生の解答は正に快刀乱麻を断つの感がありました。誠に新鮮な驚きを与えられ、新たな経験の世界に導かれ、興味と感激をしみじみと味わいました。

先生は小樽高商の商業英語の伝統を確立され、全国的に母校の声価を高められました。戦後は現小樽女子短期大学長の木曾栄作先生が引き継がれ、名著「商業英語活用辞典」の刊行などによって伝統と声価を一段と強化されました。私は木曾先生には昭和6年以来今日まで多大のご懇情とご指導をいただきましたが、今日、はからずも、私が先生の後を継ぎ、商学部・短期大学の両方において商業英語を担当するようになりましたのは、奇しき因縁と感じますと共に、往時を回顧する時誠に大きな光栄であると痛感する次第であります。

浜林生之助先生は英文学の泰斗で、国文学にも造詣が深く、講義は豊かな学識に裏づけられ滋味が溢れるばかりでありました。また名訳が連続し、学生を魅了し、英文学の面白さを満喫させました。私たちは次の時間が待遠しく思われました。先生の英語の立派なことは定評がありました。当時の同僚教官で、後に *A History of Modern Japan* の著者として有名になりました Oxford 大学の Richard Storry 先生が数年前本学を訪ずれ講演をされた時、浜林先生の英語は 100 per cent perfect であったと追憶されたように、驚嘆すべき実力を備えられておりました。先生の英語のスピーチは逸品で、聖書や英文学からの引用があり誠に気品に満ちた立派なものでした。

当時外人教師としては、Daniel Brooke McKinnon 先生が傑出しておりました。先生は大正6年から昭和17年まで在職されましたが、一生を本学のために捧げられているように感ぜられました。豊かな識見と経験に基いた、学生の実態をよく心得られた教授法で、ユーモアを交えた興味のある授業の中に学生に対する愛情がよくうかがわれるのでした。今日先生の著書 *Why Not Ask?* をひもときますと、その教授法がいかに進歩的であったかが判ります。深い思考と慎重な工夫が随所に見受けられるのには感心します。後年になって国際活動に従事する卒業生が異口同音先生の恩沢に感謝するものであります。昭和42年に緑丘会が謝恩のため先生を日本に招待し、本学の講演をはじめ、各地で謝恩歓迎会を開催したことも先生の教師としての偉大さを物語るものであります。

先生のほかにも専任の外人教師がおり、英語関係だけでも計4名の先生に習いました。しかし、学生から見れば一番関心の深い英語の先生は 苜米地先生と 浜林先生で、すでに英語の達人として全国的に令名の高い両先生に対し、絶大の尊敬と憧憬を抱いておりました。また両先生とも本道における英語教育の最高権威者として指導的地におられました。こうした影響から卒業生の中から英語教員が輩出したものでした。戦後は木曾栄作先生の活躍が目覚ましく、北海道英語教育研究会の誕生となり、世界的学者や国内の最高権威者を本道に招き全道大会を開催するなど本道の英語教育に貢献されました。

私は当時の小樽高商の英語教育に影響を受け、英語教員を志望して教育界に入りました。それから24年間中等学校に勤務しましたが、恩師の模倣をしている自分をしばしば発見したものでした。昭和30年に本学短期大学部に転じましたが、この頃 Michigan 大学 Fries 教授の Oral Approach が日本に紹介されて来ましたので、深い関心を持つようになりました。幸いその翌年アジア財団とフルブライト委員会の研究員としてアメリカに留学する機会に恵まれましたので、Michigan 大学で Fries, Lado, Pike, Markwardt などの世界的権威者の教え受け、大きな影響を受けました。外国語としての英語教授の分野では何と云っても Fries 教授が中心的存在で、すでに Oral Approach を完成し、世界の視聴を集めていましたので、私は特にその理論と実際を研究、観察しました。

昭和32年に帰国しますと、丁度わが国ではこれから Oral Approach が盛んになろうとする情勢でありました。私は乞われるままに札幌を始め全道各地を行脚し、講演と実演授業を行い、この教授法を伝達しました。大学の授業にもこの方法の長所を活用するよう努め、論文でもその長短を論じました。Oral Approach のわが国における全盛期は昭和30年代で、構造言語学と行動主義心理学に基くこの教授法は一枚岩の如く不動の地位を占めている感がありました。

しかし、Oral Approach はやがて反動を迎える運命にありました。口頭

による Pattern Practice を主な技法とするこの指導法は、認知主義学習理論と変形生成文法の側から批判を浴びるようになりました。無味乾燥で機械的になり勝ちであるという理由で、Pattern Practice に反論が出て来たばかりでなく、Oral Approach の理論的根拠そのものに批判の矢が向けられるようになりました。しかし教授法ということになると Oral Approach に代わり得るほどの有効な代案が確立しているわけではありません。Pattern Practice の実施上の工夫が適切な場合には、強力な教授法としての価値が依然として存在すると思われれます。それぞれの教授法には長短があり、一つの教授法だけですべてを律するのは無理が伴うこととなります。折衷的な方法により相互補完を計るべきものと考えます。

商業英語の分野では、アメリカ留学中ミシガン大学経営学部でアメリカの新しい商業英語の流れを研究しましたが、誠に有益でした。それはいわゆる you attitude に徹する書き方であって、紋切型な旧来の商業英語を越え、平明で効果的な、communication の本質に沿った迫力のあるビジネス・レターを作成することでありました。学生の指導は小クラス制（約 15 名）で、ディスカッションが中心で、宿題に関しては研究室での個人的面接指導もあり、火花を散らすような緊迫感があり、大いに参考になりました。帰国後は商社や貿易銀行・船会社などと接触する多くの機会に恵まれ、そのため日本の外国貿易や英語商業通信の実際を詳しく見聞することができ、商業英語教育の進むべき方途について大きな示唆を受けました。これらはすべて本学に在職のため得ることのできた収穫であったと痛感いたします。

停年退職を過ぎました今日回顧しますと、学生時代をはじめ、その後も引き続き多種多様な面において限りない恩恵に浴しました本学に対し感謝にたえない次第であります。また先には貧しい業績にもかかわらず短期大学部名誉教授の称号を授与され、今回はさらに記念論文集を発刊されますのは、身に余る光栄と心からお礼申しあげます。最後に長年月にわたり多大のご懇情を

賜りました多くの関係各位に厚く感謝申しあげると共に、緑丘学園の永遠の
栄光を祈念しまして擱筆いたします。